

(補論)「J. デューイと問題解決型学習再考」

尚絅学院大学 総合人間科学部 人間心理学科
教授 太田健児

1) デューイの教育学

J.デューイ(John Dewey,1859-1952)の教育学を表すキーワードはいくつも存在する。進歩主義(保守的教育観への対抗の意)、プラグマティズム、道具主義、実験主義、経験主義(経験と経験の再構成)、知識と行動との一元化、連続性、社会科、民主主義、社会の改造等々数多い。

デューイの教育学は、知識偏重型の系統主義学習とは異なっており、①教育目的、②教育内容、③教育方法、④評価の点で、いずれも対極に立つものであった。①について、教育はそもそも社会の機能とされ、①は生活の必要性から生じるとされる。個体と社会的環境とは連続しており、従来のホモ・サピエンス的な人間像に加え、理性や知性とか真理さえも人間の生命や生活の向上の道具とみなし、真理の基準を行動の有効性におくホモ・ファーベル的な人間像が加味される。それゆえ、教育にとって経験の意味を深化させ後続する経験ではさらに豊穡なものが得られるという「経験の再構成」が大事とされる。さらに教育は何らかの外的な目標に向かって指導する事でもなく、成人してからの生活準備でもない。教育は教育以外の何ものかに従属する必要はなく、民主的な市民を育成し、社会の構成員となし、社会を改造していくという。デューイが民主主義的な教育観、進歩主義的教育観の持ち主といわれる所以である。ここから②は当然、知識と行動との一元化の観点から日常の身近な生活や出来事から教材を紡ぎ出す事となる。③は子どもの自己活動を重んじ、主体性・能動性・クリエイティブさが発揮できる教育方法が要請され、Learning by doing、実験主義(理科系の実験という狭義のものではない)というデューイ教育のキーワードがここから出てくる。④は教育が「教育のプロセス」それ自体の他に目的をもたず、それ自体が目的とされるという前提で考えられる。そして教育のプロセスは不断の再構成・変化のプロセスでもある。生長(=成長)はもっと生長する事以外に目的をもたない。以上の定式から、テストの点数だけでの一元的評価はここでは採用されない。

では、このような特長を有するデューイ教育学は日本の教育現場にどう影響を与えてきたのだろうか？

2) 教育現場での問題解決型学習の歴史と現在

デューイ教育学の根本にはまず「経験」があり、経験の前提としての日常「生活」がある事は上記1)で確認された。さて、日本の戦後の教育はアメリカ使節団の来日から始まり、「社会科」の新設が大きな転換点であった。その根本にあったのは、社会で生きていくためには社会を知る、その社会の構成者は他ならぬ自分自身、その自分には義務だけではなく権利もある、その権利を保障してくれるのは民主主義社会、という良い意味での循環論である。知育は知育として徳育は徳育としてではなく、それらが一体化され、知識と行動とは連動したものとされ、個体は社会環境で生きていくための知識や情報、市民としての権利や義務や公共性を学んでいく。民主主義社会の構成員に必要な事柄、また日常生活を営むための様々な事柄を他教科と共に学び、道徳性もそこで養われる。この教育学的根拠が先のデューイの「経験」や「生活」や「連続性」にある事は明らかであろう。

この対極にあるのが「系統主義」学習であった。知識の系統性・体系性に従って、段階的に継続的にパターン化された授業の中で生徒たちは学習していく。所謂受験勉強型・試験型の知識体系とその学習

とはこの系統学習の系列に入るであろう。そこでは誤謬や失敗は許されず、実際の体験や実物ではなく、言葉や図柄で理解された「疑似的存在」で殆どが賄われる。学習内容も決められており自分で選択できない。

このような教育事情の中で、次第に「デューイ」あるいは「問題解決型学習」が「系統主義」学習に対するアンチテーゼとして担ぎ出され、シンボル化されてしまったきらいがある。「系統主義」学習ではどうしても一律的な「評価」の問題が出てくる。それを根拠にした学力の序列化、偏差値問題、学業不振の生徒、さらには学校間の序列化などの動きに対して、真の教育を目指し守る立場、子ども一人一人の学びの尊重（個性尊重主義教育）の立場から、デューイの問題解決型学習がその守護神として希求され一種の対抗イデオロギー化してしまった点は否定できないであろう。そして社会のあり方まで問いながら、社会の改造（革命ではないという意味での改造でデューイ自身の用語）を目指していく啓蒙的使命を担った着想として定着してしまっただけといえるであろう。だが、この是非については当該報告書の中で問うところではない。

大事な点は、デューイ自身の教育理論からすれば、前述のとおり、決して知識を否定するものでもなく、系統主義学習を否定するものでもなく、生活準備の教育のみとするものではなかった点である。知識と行動との一元化、経験、連続、ホモ・ファーベルの世界なのである。

では未来の日本の教育現場に相応しい問題解決型学習とはどのようなものであるべきなのか？

3) デューイの問題解決型学習の意義

教育史には「直観教育」あるいは「実物教育」という教育学用語が存在する。ペスタロッチ(Johann Heinrich Pestalozzi,1746-1827)が語り、ルソー(Jean-Jacques Rousseau,1712-1778)も語った。直観とはいわゆる直感を意味せず、直に目で見、手で触る、耳で聞きながら覚えたり判断したりする事である。実物教育も同じで、人伝えや概念や言葉からではなく、自分自身で実際に確かめる事を意味する。中世以来ヨーロッパの語学教育は学術公用語のラテン語文法の学習であったが、授業は何とラテン語で行われていた。ラテン語を全く知らない学生にラテン語で授業をするのである。このような教育へのアンチテーゼが直観教育・実物教育であった。例えば言語学の古典的な理論でこの事態を説明してみよう。言語学者ソシュール(Ferdinand de Saussure,1857-1913)は「シニフィエ」(signifié=記号内容=所記)・「シニフィアン」(signifiant=記号表現=能記)の関係を説いたのは周知の事である。猫が存在すれば、猫が存在する事自体が「シニフィエ」であり、言語は違えど人類共通に表象可能である。他方、日本人は **neko**、英語圏の人々は **cat**、フランス語圏の人々は **chat** という音声と綴りとで、つまりそれぞれの記号表現で「シニフィエ」を表象する事がシニフィアンである。森羅万象全ての存在はこれら二側面を有して「存在」しているわけだが、他方、人間は「シニフィエ」・「シニフィアン」が乖離してしまった場合その「存在」を表象できなくなる点が厄介である。つまり英語圏の人々を前に、日本人が **neko** と叫んでも（「シニフィアン」）、英語圏の人々はその「シニフィエ」を表象できない。しかし「シニフィエ」（そこに居る猫）を指差して **neko** と叫べば、日本では **cat** を **neko** と呼んでいるのだなという事で表象が可能となる。

ここから、直観教育や実物教育の意義が分かってくる。「シニフィエ」・「シニフィアン」が乖離していないのがそれらの特長だったのである。しかし教育現場では、特に「系統主義」教育では、そのようなシニフィエ・シニフィアンが乖離したような教育になっているのではないか？なるほど数学や英文法のように所謂抽象度が高いものになれば、「シニフィエ」・「シニフィアン」は乖離せざるを得ず、特別で専

門の教育方法が必要になってくるが、それでもなお「次元の違ったシニフィアン」を教材に応じてその都度その都度上手に創出できる教師こそが教え上手の先生となろう。「わかりやすさ」の根本構造とはこの事を指す。

以上の事から、デューイを発端とする問題解決型学習こそ、当に学校教育という環境内で、「シニフィエ」・「シニフィアン」の乖離が非常に少ない学びであった事が分かる。社会の構成員として必要不可欠な学びの内容や自分の興味・関心に基づいたテーマ設定、それゆえのモチベーションの高さ、学びの結果ではないプロセス自体の評価など、いずれも直観教育・実物教育をさらに緻密にして現代社会に適応できる教育にした事が分かる。

4) 問題解決型学習の今後

これまでの考察から、問題解決型学習の特長は「シニフィエ」・「シニフィアン」の可能な限りでの一体化を前提にしている事が分かった。そして、問題解決型学習とは、自分たちで問題点を見つけ出し、自分の問題とする事（人ごとではない当事者感覚＝一人称化）、自分たちで調べる、話し合う事、相互の情報・知識・意見交換などから構成されるべき事も、現在の日本の学校教育現場を踏まえれば、妥当性ある帰結として異論はなかろう。

そして、今最も必要なのは問題解決型学習の意味内容を拡大していく事である。詭弁のようであるが、「系統主義」学習あるいは受験勉強の渦中にあり、知識を詰め込まれている中で、必死にそれらを理解していく事、自分にとっての喫緊の課題＝問題を何とかする事も問題解決型学習ではないか？という問いを私たちは一笑にふす事ができるだろうか？

ここから、問題解決型学習の実践例を数多く収集する必要性が痛感される。問題解決型学習のみならず、その看板を掲げていなくても、中身が実質的にはそれに該当する実践例は数多く存在するからである。同時にそれらの実践校が集う機会をできるだけ多くし、意見交換をしながら、問題解決型学習を再定義していく作業が不可欠となってくる。加えて、良い実践事例は惜しみなく他校に公開して、それらを各校で学び合い、共有してネットワークを形成していく事も重要になってくる。そして、デューイの教育学の意義、問題解決型学習の長所、日本独自に形成された問題解決型学習の歴史などの意味を反芻しながら、教師にとって、学校にとって最も大事な点は何かを忘れない事である。どこの学校の生徒であれ、一人でも多くの生徒が、意欲的に自主的に能動的に自らの知恵と身体とを駆使して学びの世界に没頭し、笑顔が満ちあふれる教室が一つでも多く増える事を願いながら、尚絅学院中高ではこれからもPBLの実践を続け発信し続けていく。

※デューイの関しては、次の邦訳文献を随時参照。

『学校と社会』(1899), 『倫理学』(1908), 『民主主義と教育』(1916),
『哲学の改造』(1920), 『人間性と行為』(1922), 『経験と自然』(1925),
『確実性の探究』(1929), 『経験と教育』(1938) .